

余りスキルの

底辺転移者

…だけど何かあるはず！

著・よっしい
yosshi presents

The Transmigrator
with LEFTOVERS
SKILLS



緩瀬泉

あやせ
いすみ

順平の同期で、社内の「高嶺の花」のような存在。スキル目当ての森信に囚われてしまう。

ティルザ

王宮の侍女。過酷な運命から守ってくれた順平を支える。

才村友郁

さいむら
ゆか

順平の後輩で、明るい性格のムードメーカー。当初、順平の悪い噂を信じていたが……

常山順平

つねやま
しゅんぺい

本作の主人公で、社内での評判はいま一つの社畜。召喚後も雑魚スキルしか与えられなかったが、社畜の経験を活かして成り上がる。

内元直士

うちもと
なおし

勇者である森信に物申す正義の青年。

森信界人

もりのお
かいと

勇者として召喚された高校生。周囲を見下して傍若無人に振る舞う。

楊村英奈

あけむら
えな

森信の恋人だが、情に厚く、困っている人を放っておけない。

登場人物紹介

CHARACTERS

第1話 巻き込まれた三人と、外れスキル

俺の名前は常山順平^{つねやまじゅんぺい}。二十八歳の、しがないサラリーマンだ。

中堅商社の営業として日々数字に追われ、上司の無茶振り^{むちゃぶ}りと顧客の我儘^{わがまま}の板挟みになりながら、なんとか現代社会という理不尽な荒波^{あらなみ}を泳ぎ渡っている。

——ちなみに、社内での俺の評判は最悪だ。

曰く^{いわ}、「だらしなくてサボり魔^ま」。

曰く、「なのに、なぜか営業成績だけはいい」。

曰く、「絶対、何かズルをしている」。

……ひどい言われようだが、まあ、無理もない。

俺は勤務中、外回りに出ていない時は社内をぶらぶら歩いて雑談^{ざつだん}ばかりしているし、パソコンで釣りだのキャンプだののサイトを眺め^{なが}ているし、女性社員と喋^{しゃべ}っている姿ばかり目撃されるし、たまに手帳^{てちょう}に落書きしているし、定時になるとさっさと帰る。

寝癖^{ねくせ}を直し忘れて出社する事も、月に数回はある。

ただ、一応の弁明はさせてほしい。

社内の雑談は、仕入れや物流や経理から、顧客の懐事情や納期の生きた情報を仕入れるためだ。釣りサイトを見ていたのは、その翌週に商談する社長の趣味が船釣りだったからだ。

ついでに言えば、女性とばかり話しているように見えるのは、単に見目のいい受付嬢との会話が悪目立ちしてしまっただけで、会話の総量なら倉庫のおっちゃんたちの方が断然多い。

…手帳の落書きに見えるあれも、商談相手の人物相関図だ。決して暇なわけではない。もっとも、そんな弁明を聞いてくれる人間は、社内にとんどのいらない。

段取りにだけ命を懸けて、汗をかいている姿を誰にも見せないのだから、当然と言えば当然だ。誤解されるのも込みで、これが俺の仕事のやり方なのである。

さてさて、今日も朝の満員電車に揺られている俺は、吊り革を掴みつつ、器用にうつらうつらとしていた。

車両の中は不快な熱気と、誰かの強い香水のにおい、そしてモーターの重低音が充満している。パーソナルスペースなど存在しないすし詰めの状態は、気を抜けばそのまま他人に寄りかかって崩れ落ちてしまいそうになるほど過酷だ。

俺の乗車駅からは中々座る事ができない。

だが、会社の最寄り駅の改札に近いこの車両に乗らないと、朝の始業に間に合わなくなってしまふのだ。

その結果、俺は吊り革に掴まったまま立った姿勢で器用に熟睡する、という悲しい特技を身につけてしまった。

我ながらどうかとは思いますが、これも日々の激務を生き抜くためのささやかなサバイバル術である。ふと視線を上げると、数メートルほど離れたドアの近くに、見慣れたスーツ姿の女性が二人、俺と同じように人波に揉まれながら立っているのに気づいた。

同期の綾瀬泉と、今年入ったばかりの後輩、才村友郁だ。

綾瀬はうちの会社の受付リーダーを務めている。

きつちりと一つに結ばれた艶やかな黒髪に、理知的な細縁の眼鏡。

どんな時でも背筋をピンと伸ばし、アイロンの利いたブラウスを着こなす隙のない美人だ。

社内でも「高嶺の花」として密かにファンが多く、営業の連中がよく彼女の話題で盛り上がったているのを知っている。

ただ、今日ばかりは連日の激務のせいか少し眠そうな顔をしており、時折こめかみを軽く押さえでは、小さく息を吐いていた。

一方の才村はというと、先輩である綾瀬の腕に遠慮なくすがりつくようにして、大きなあくびを

噛み殺していた。

子犬のような人懐っこさと愛嬌を持つ彼女は、入社早々から受付のムードメーカーとして重宝されている。

綾瀬も、まとりつく才村を邪険にする事なく、妹のように面倒を見ているようだった。

……ちなみに才村は、俺の事を例に漏れず「サボってばかりのやる気のない先輩」だと思っている節がある。

目が合うと、たまに「あ、噂のサボり魔の人だ」という顔をされる。悲しい。

そういえば昨日の昼間、得意先の洋菓子店から試作のケーキを預かり、帰社したついでに受付の女性陣に差し入れをしたんだっとな。

俺はいつも「新商品のリサーチだ。良くも悪くも厳しいレポートを提出する事」を条件に、彼女たちにスイーツを配っている。

試食データのばらつきが出ないよう、渡すテスターは無類の甘党から控えめ派まで毎回同じ面子に固定していて、綾瀬も才村もその貴重なテスターの一員だった。

これも周囲からは「業務中に菓子で女子を口説くサボり魔」に見えているらしいが、あのリサーチレポートのおかげで取れた契約は一つや二つじゃない。

そして受付リーダーの綾瀬は、その辺の事情を全部知っている数少ない人間だ。

毎回、誰より辛辣で、誰よりの確なレポートを上げてくるのはあいつだった。

今日あたり、あいつからあのケーキの辛口な感想を回収するでしょう。

そんな事をぼんやりと考えていた、矢先の事だった。

——ぐらりと。

突然、足元から世界がひっくり返るような、強烈な吐き気と目眩が俺を襲った。

「……っ！」

咄嗟に吊り革を強く握りしめる。だが、力が入らない。

過労で倒れるのか？ いや、違う。

電車の揺れや急ブレーキでもない。

空間そのものがぐにやりと歪むような、極めて異様な感覚だった。

周囲のモーター音や人々のざわめきが、まるで水中に沈んだように急速に遠ざかっていく。

視界の端で、窓の外を流れていたはずの景色が、真っ白な光に塗り潰されていくのが見えた。

見ると、異常が起きているのは俺だけではなかった。

すし詰めの車内で、周囲の乗客たち——疲れた顔のサラリーマンも、スマホを見ていた登校中らしき高校生のグループも、次々と糸が切れた操り人形のようにバタバタと倒れていく。

何が起きているんだ？

テロか？ 毒ガスか何かか？

薄れゆく意識の中、俺はどうにか首を巡らせて、遠くにいる綾瀬と才村の姿を探した。

二人も体勢を崩しながら、床に倒れ込もうとしている。

綾瀬と目が合った。

彼女が「えっ？」と、整った目を驚愕に見開いたのを最後に、俺の意識は完全に、そして唐突に途切れた。



「う……うーん……何だったんだろう？」

気がつくと、俺は冷たく硬い床の上に倒れていた。

ゆっくりと身を起こし、重い頭を振りながら周囲を見渡す。

頬に触れる空気はひんやりと冷たく、どこかカビ臭いような、古い石と香が混じったような臭いがした。

……あれ？ 電車の中じゃない？

見上げると、遥か高い天井から巨大なシャンデリアがいくつも下がっていた。

床には精巧な模様が彫られた石畳が敷き詰められ、太い大理石の柱が並んでいる。

まるで中世ヨーロッパの神殿か、大聖堂のような巨大な建物の中だった。

窓らしきものは見当たらないが、壁のあちこちに据えられた松明のような灯りが、揺らめきながら空間を照らし出している。

そして周囲には、俺と同じように電車に乗り合わせていたであろう人々が、数十人も倒れていた。くたびれたスーツのリーマン、数人の女子高生や男子学生、仕事帰りらしき若い女性、定年近いおっさんまで、年齢も性別も様々だ。

何人かが俺と同じように意識を取り戻し、ふらふらと起き上がっては「どこだここは？」
「痛っ……」と困惑の声を上げ始めていた。

俺は咄嗟に、自分の足元にあったビジネスバッグを引き寄せ、中身を確認した。

……よし、ある。

中には仕事用のノートパソコンの他に、趣味のサバイバル入門書がある。

窯の作り方から火の起こし方、手持ちのアイテムだけで生き延びる方法まで、知識がぎっしり詰まった一冊で、読み返しすぎて表紙がすっかりくたびれている。

面白くていつも持ち歩いているやつだ。

それと、小ぶりのソーイングセット。

鉄があるから出先で便利だし、いざ災害に遭った時のために折り畳みのツールナイフや常備薬、絆創膏、飴ちゃんなんかも押し込んである。俺の生命線だ。

まさかこんな異常事態に居合わせるとは思わなかったが、何が起きるか分からない以上、手放すわけにはいかない。

万が一ひつたぐられたり落したりしたら大変だと、俺は急いでカバンをリュックタイプにして背負い直した。

改めて周囲を見直すと、すぐ近くに見知った顔が二つあった。

「綾瀬！ 才村も！」

俺が声をかけると、顔を伏せていた二人がハッとして顔を上げた。

「常山君……？ ここ、どこなのよ……」

「常山先輩っ！ よかった、先輩もいたんですね……！」

俺の顔を見た瞬間、才村は恐怖で涙目になりながら、すがりつくように近づいてきた。

いつもはジト目で俺を見てサボリ魔だ！ と決めつけてくるのだが、その手はガタガタと小刻みに震えている。

一方の綾瀬は、どうにか自力で立ち上がってスーツのスカートの埃を払い、「落ち着いて、まずは状況を……」と呟いて毅然と振る舞おうとしていた。

だが、その声も、眼鏡のブリッジを押し上げる指先も、微かに震えているのが分かった。

普段の凛とした隙のない彼女からは想像もつかないような動揺の仕方だった。

彼女も内心ではパニックになっているのだ。

俺は二人のそばに歩み寄り、「大丈夫だ。とりあえず一緒にいよう」と、なるべく低く落ち着いた声で安心させるように言った。

綾瀬が短く息を吐き、微かに安堵したように小さく頷く。

才村は俺のジャケットの袖をぎゅっと握りしめて離そうとしなかった。

「サボリ魔がまともだ」とでも言いたげな表情を浮かべているが……いや、それは俺の気のせいかな？ 震えているしな。

その時だった。

「ようこそ勇者様、ならびに御一行様方。こちらの一方的な都合で召喚してしまい、誠に申し訳ございません」

ホール全体に響き渡るような、やたらとよく通る声が降ってきた。

見上げると、俺たちがいる場所から一段高い祭壇のような場所に、豪華な白いローブを着た神官のような老人が立っていた。

その傍らには、宰相か高官を思わせる豪華な衣装の男と、見た事もない恰好をした者たちが並び、

こちらを見下ろしている。

うん？　今、勇者と言ったか？　召喚？

「おい！　何だこれは！　俺は急いでるんだ！　テレビか〇ーチューブか知らんが、こんな番組の収録に付き合ってる時間はないぞ！　元の場所に戻せ！」

「明日から大事な試合があるから、早く帰してよ！」

リーマンや学生たちが状況を理解できず、一斉に騒ぎ始め、パニックになりかける。

だが、神官らしき老人は全く動じる様子もなく、うやうやしく頭を下げて言葉を続けた。

「ああ、それはご心配には及びません。何せこちらとあなたたちのいた世界の時間軸は少し違っておりましてな。こちらで数年お過ごしになられても、こちらのお願いが解決すれば、召喚前の場所召喚されたその時間へ全員を無事にお送りする事ができます。ですので、誠に申し訳ありませんが、今しばらくだけお付き合いただくようお願いいたします」

何だかひどく嘘くさい。

帰還の仕組みも過去の例も示さず、ただ信じろと言っているだけだからだ。

だが、周囲の騒ぎをお構いなしに、男は驚くべき言葉を口にした。

「それと、本来は『勇者様』だけを召喚する予定でしたが、どうやら勇者様の周りにいらした方々も術式に巻き込んで、一緒にこちらへ引き込んでしまったようで。重ね重ね申し訳ござい

ません」

「……は？　巻き込まれた？」

俺の隣で、綾瀬が信じられないというように呟いた。

俺も同感だった。冗談じゃない。

「ですが、魔王を倒していただければ、皆様は元の世界に戻れます。勇者様におかれましては、他の皆さまともご協力いただき、どうか魔王の討伐をお願いしたい。誠に申し訳ございませんが、

『魔王は勇者様にしか討伐できない』のでございます」

お前らが自分でやればいいじゃないか！　警察を呼べ！　と周囲から罵声が飛ぶが、男は意に介さず、さらに続けた。

「それで、皆様の旅の活動資金と、スキル……特別な力をいくつかご用意させていただきました。勇者様と、勇者様と一緒に行動される方には、それ相応の強力なギフト、スキルをご用意いたします。それと最新の装備、十分な資金も」

そんな中、一人の男子高校生が神官たちに促されて、集団の中から歩み出た。

彼はどこか優越感に浸ったような、ヒロイズムに酔いしれた顔で祭壇の階段を上り、友人らしき数人の男女もそれに続く。

なるほど、あれらが「勇者御一行」になるのだろう。

神官がうやうやしく彼らを別室へと案内しようとする中、残された俺たち——つまり「巻き込まれただけの一般人」に向かつて、男はこう言い放った。

「残りの皆様にも、もちろん当面の生活の保障と資金はご用意できます。ですが、お渡しできるスキルは人数が想定以上に多いため、一人おひとつにさせて頂きます。皆様、そちらの水晶に触れてお選びください。ちなみに——『早い者勝ち』ですよ？」

その一言が、完全に引き金だった。

「早い者勝ちって……ふざけんな、俺が先だ！」

「どけ！ 俺が一番だ！」

特に若い男性や血の多いリーマンたちが、祭壇に安置された巨大な水晶に向かつて、我先にと殺到し始めた。

完全に狂乱状態だ。誰も周囲の事など見ていない。

生き残るための力が限られていると知れば、人は簡単に理性を失う。

そして最悪な事に、スキルが得られるという祭壇の水晶は、俺たちが固まっていた場所のすぐ近くだったのだ。

後ろから押し寄せる数十人の波を、俺たちは逃げる間もなくモロに被る形になった。

「きゃあっ！」

「綾瀬っ！ 才村！」

人の波に激しく押され、綾瀬がリーマンの肩に突き飛ばされた。

彼女がバランスを崩して石畳に倒れ込むと同時に、「バキッ」と嫌な音が鳴った。

殺到する連中の革靴によって、彼女が落とした眼鏡が思いきり踏みつけられたのだ。

綾瀬はひどい近視だ。

眼鏡がないと足元すらまともに見えないと聞いた事がある。

「眼鏡……っ」

綾瀬が探そうと手を伸ばしかけたが、倒れ込んだ勢いで腕を石畳に強打したのか、「痛っ……！」と顔を歪めて、そのままうずくまって動けなくなった。

「才村っ！」

才村の方に目を向けると、人波に揉みくちゃにされながら彼女も悲鳴を上げて倒れ込んでいた。咄嗟に手をついたらしいが、その顔が「痛っ」と激しく歪む。

「ふざけんなっ！」

俺は無我夢中で二人のそばに飛び込んだ。

石畳に倒れたまま動けない綾瀬と才村を両腕で強く引き寄せ、上から覆い被さるようにして二人を庇った。

「きゃっ……先輩!？」

「常山君っ……!」

咄嗟に二人を腕の中に抱え込んだ瞬間、鼻先を微かなシャンプーの甘い香りが掠め、腕の中には明らかに男性とは違う、柔らかく華奢な体の感触があった。

スーツのシャツ越しに伝わってくる二人の温かい体温と、密着した体の柔らかさに、極限状態にもかかわらず一瞬だけ思考がショートしそうになる。

バカか、こんな時に何を考えているんだ俺は。しつかりしろ、二人を守るんだ。

俺は必死に邪念を振り払い、さらに強く二人を抱き込んで、亀のように丸くうずくまった。

直後、無数の足が俺の背中や肩を無慈悲に踏みつけ、蹴り飛ばしていった。

「ぐっ……!」

「先輩っ!」

「常山君、あなた……っ」

背中を走る鈍い激痛に耐えながら、俺は歯を食いしばって動かなかった。

スキルに目の眩んだ連中は、倒れている俺たちをただの障害物としか思っていない。

彼らの興奮した叫び声が、頭上を次々と飛び交っていく。

「鍛冶スキル? ああ、武具を作るサポートが期待できますね。いいスキルですよ」

「鑑定スキル? あれは駄目ですよ。知ってる物の名前ぐらいしか分かりませんから。戦闘には役に立たない、まあ外れスキルですね。選ばない方がいいでしょう」

「生活スキル? ああ、暮らしていくのに便利です。商売もできますから」

「家事全般スキル? 女性なら誰でもできる程度の物ですよ。モノ好きだけですんなのを選ぶ者は」

「服飾スキル? まあ、ただの縫い物の類ですな。直接戦闘には向きません」

そんな神官たちの声が聞こえる中、強力な魔法やめばしい武器のスキルは、力づくで群がった連中によって根こそぎ奪われていった。

第2話 スキルの化け方と、勇者様

嵐のような争奪戦が過ぎ去った。

ようやく人の波が引き、周囲が静かになったのを確認してから、俺はゆっくりと背中中の痛みを堪えながら体を起こした。両腕の中には、綾瀬と才村がいる。

二人とも石畳に倒れたまま、俺のシャツの胸元を強く握りしめ、顔を埋めるようにして寄りか

かっていた。

足元の石畳に、踏みつけられて無残に変形した眼鏡の残骸が落ちている。

レンズが外れ、フレームがひどく歪んでいる。

俺はハンカチを取り出し、破片で怪我をしないよう丁寧に包んでカバンに押し込んだ。

幸いレンズは割れていないようだ。後で修理すればとりあえず使えるだろう。

気がつく、この場には俺たち三人と、先ほどから喋っている神官の男しかいなかった。

他の連中は全員、スキルを受け取って満足げに回廊の方へ移動していた。

「大丈夫か、才村？」

「はい……常山先輩、庇ってくれてありがとうございます。でも、あの、手首が……」

「見せて」

彼女が差し出した右手首は、すでに赤く腫れ上がっていた。うつすらと熱を持っている。

以前、趣味の山登りで足をくじいた時にソフトボールほどに腫れ上がって「これは折れたな」と思った事があるが、あの時に比べればまだマシだ。

「動かさないで。たぶん折れてはいない。ひどい捻挫だが、じつとしていれば数日で治る。俺も似たような経験があるから」

「ああ、よかった……」

才村が小さく息をつき、痛みを堪えながらも安堵の表情を浮かべた。

「綾瀬、腕は？」

才村の様子を確認したまま、俺はもう片側にいる綾瀬に声をかけた。

返事がない。

振り向くと、綾瀬が俺の左腕にしっかりとしがみついたまま、石畳の床をぼんやりと見つめていた。

眼鏡がないため焦点の合わない目で、ただじつとしている。

普段のきびきびとした姿からは想像もできない、まるで迷子になった小動物のように怯えた様子だった。

「……綾瀬？」

「あ……」

俺の声で我に返ったように、綾瀬がはっと体を離れた。顔が微かに赤い。

「そ、その、ごめんなさい。つい……パニックになって、しがみついてしまつて。重かったわよね」

「こんな状況だから仕方ないだろ。気にするな。それに別に重くなかったぞ」

「……ありがとう」

ぽつりと、小さな声だった。

いつもの凜とした綾瀬とは別人のような、素直で弱々しい声。

才村が痛む手首を押さえながら、目をぱちくりさせて二人のやりとりを見ていた。初めて見る綾瀬の表情に、よほど驚いたのだろう。

そして「サボり魔の先輩が優しい。しかもやる気のなさそうな常山先輩が、頼りがいのある人」……絶対そう思っているな。

「腕、見せてくれるか」

俺は改めて綾瀬の腕を確認した。

スーツの袖を捲ると、色白の肌に生々しい打撲の痕が赤く残っている。

骨には異常なさそうだが、動かすとかなり痛むはずだ。

「動かしてみて。……痛いかな？」

「……少し。でも動くわ」

「骨は大丈夫そうだな。しばらく無理はするなよ」

俺は才村の怪我をしていない方の手を握って立たせた……才村の方が先に強く掴んできたのだが、その手はひどく汗ばんで、震えが伝わってくる。

綾瀬も反対側から俺の腕に手を添えて立ち上がった。今度は意識的に、そっと頼るように。

三人が揃ったところで、神官の男が俺たちを見て鼻で笑った。

「おやおや、呑気なものですねぇ。もう誰も見向きもしない『外れスキル』しか残っていませんよ？」

「何が残ってるんですか」

「家事全般と、鑑定、そして服飾ですね。服飾は衣類の仕立てや繕い、鍛えれば多少は衣服に丈夫さを付与できるとも言いますが……戦いの役には立ちますまい。私的には、そちらの女性二人が家事全般と服飾、男性が鑑定にされた方が、いくらかマシじゃないかとは思いますがね」

まあ、俺が家事全般を取っても、あまり有効利用できそうにないな。

「ちょうど三つ残ってるな。じゃあ、俺が鑑定にしておく。どちらもあの人から言わせれば外れスキルらしいけれど」

「才村さんは家事全般で、私が服飾？ ……分かったわ」

綾瀬が俺の腕をしっかりと掴んだまま頷く。

ひどい近視で目がよく見えない今、俺の声と気配だけが頼りなのだろう。

才村も痛めた手首をかばいながら「はい」と答えた。

俺は綾瀬と才村の手を引いて祭壇に向かい、それぞれ水晶に触れた。

その瞬間、頭の中にふわりと温かい情報が流れ込んでくるような、不思議な感覚があった。



そして、才村がスキルを受け取った瞬間、俺の視界？ 頭の中？ に突然、ゲームのステータス画面のような半透明のウィンドウが現れた。

……なんだこれ？

名前	..才村 友郁
性別	..女性
種族	..人間（転移者）
年齢	..二十三歳
レベル	..1
所属	..社会人一年目
所有スキル	..家事全般 Lv1

鑑定レベルが低いので、これ以上の表示は不可能

……才村のフルネーム、才村友郁。

「ゆか」というのは綾瀬が呼んでいるのを聞いて知っていたが、「友郁」はこういう漢字を書くの

か。なるほど。

いや、そうじゃなくて。なんだ今の画面は。幻覚^{げんかく}か？

「大丈夫か、才村？」

「はい……ありがとうございます、常山先輩」

え？ と混乱しながら、俺は隣で腕にしがみついている綾瀬に視線を移した。

すると今度は、綾瀬の姿に重なるようにして、ふわりと別の画面が浮かび上がった。

名前	.. 綾瀬 泉
性別	.. 女性
種族	.. 人間 (転移者)
年齢	.. 二十八歳
レベル	.. 1
所属	.. 社会人六年目
所有スキル	.. 服飾 Lv1

鑑定レベルが低いので、これ以上の表示は不可能

は？ なんだこれ。また見えた。

綾瀬の年齢やスキルまで……同期だから年齢は知っているんだが。

一体何が起きてるんだ？ これがさっき俺が受け取った「鑑定」とやらの効果だとか？

俺が訳が分からず固まっていると、服飾スキルを受け取り終えた綾瀬が、少し安堵したような声を出した。

「ちゃんと受け取れた気がするわ。……常山君？ どうかしたの？ 私の顔をじっと見て」

「あ、いや……なんでもない。気にするな。残り物には福があるって言うだろ」

俺は慌てて画面から目を逸らし、不安そうな二人に、あえて軽く笑い飛ばしてみせた。

「外れスキルだろうが何だろうが、俺たちは今まで社会の理不尽な荒波に耐えながら生き延びてきたんだ。とりあえず俺たち大人のやり方で、ここを生き延びよう」

「常山先輩、こういうときって意外と頼りになるんですね？」

「何を言っているんだ才村、俺はいつもこうだぞ？」

「才村さんはまだ入社して間もないから知らないかもしれないけれど、彼って本当はそれなりにできる方なのよ？ ただ間が悪いというか、自分をよく見せようと思っていないのか、誤解を招く事もよくあるから社内での評価はいまいちなの」

「うるさい、それ褒めてないだろ」

「ちゃんと褒めてるわよ」

二人が何かアイコンタクトを取った気がしたが、まあいい。

先ほど別室へと消えた勇者御一行の騒がしい声が、回廊の先の方から聞こえてくる。俺たちはそちらに視線を向けた。

「……君たちはここで待っていてくれたまえ！ 生産スキルを手に入れた方々、僕らの旅の手助けになるアイテムの生産、よろしく頼むよ」

目上の大人に向かってあんな口をきいて大丈夫か？ というか、残された大人たちは誰一人として頷いていないぞ。まあ俺たちには関係ないか。

やがて俺たち三人の前に、落ち着いた色合いのメイド服のような衣装を着た二人の女性がやってきた。

「もしよろしければ、転移者様について少々説明いたします」

「分かった。じゃあ頼みます」

二人の女性は俺たちに丁寧な説明をしてくれた。

周囲の連中がパニックで喚び立てているさだが、要約するところだ。

この世界にはもともとレベルの概念がいねんはないが、異世界から来た「転移者」にのみレベルの概念が

存在する事。

そして「ステータスオープン」と頭の中で念じれば、先ほど俺が見たような自身の能力値が確認できる事。

説明と共に、金属製でひんやりとした重みのあるカードを手渡される。

「身分証代わりのカードです。ただし、普通のものではなく、転移者様限定の魔道具ですので、くれぐれも扱いにはお気を付けください。このカードを所持していれば、いつでもご自身のステータス表示が出ますし、お金の管理もできます」

「便利だな」

俺は試しに「ステータスオープン」と念じてみた。

すると、先ほどの半透明の画面が頭の中にふわりと現れた。

名前	.. 常山 順平
性別	.. 男性
種族	.. 人間 (転移者)
年齢	.. 二十八歳
レベル	.. 1

「ご自身のお名前などは出ておられますか？」

「ええ、出ています」

「このカードがあれば、いつでもご自身の情報を確認する事ができます。表示のカスタマイズ等も設定できるそうですので、後ほどいろいろとお試しく下さい」

さらに「あと、こちらを」と、革製のしつかりとした肩掛けカバンを手渡される。

「中に護身用の短剣と、当面の替えの服をご用意してあります。カードでの決済が使えない場合もありますので、銀貨と金貨も少し入れてございます。カバン自体も『収納』の魔道具ですので、見た目以上に物が入りますよ」

「至れり尽くせりだな。ありがとうございます」

俺はカバンを受け取った後、隣で痛みを耐えている二人を振り返った。

「ところで……怪我人が二人いるんだ。才村が手首をひどく捻挫していて、綾瀬も腕を打撲している。ここが王宮なら医務室かどこかで治療できないか？」

「少々お待ちください」

女性は少し困った顔をした後、なぜか勇者様御一行の方へ小走りで向かっていった。

しばらくして、騒がしい御一行がこちらにやってくる。

男子三名、女子三名。全員が高校生のように、男子は制服を着崩している。

「何だリーマン？ 怪我したって？」

先頭を歩く男子高校生——さつき祭壇で一番ふんぞり返っていた勇者だ——が、顎でしゃくるように聞いてきた。

「この二人だよ。一人は手首の捻挫、もう一人は腕の打撲をしてる。ここに来てから怪我をしたんだ」

俺は才村と綾瀬をそれぞれ示した。

「治せよ、英奈」

勇者が背後にいた女子高生にぞんざいに命じる。

「えっ、マジで!? ここで私の魔力使っちゃっていいの？」

英奈と呼ばれた女の子が、少し驚いたように声を上げた。

「いい練習台じゃないか。やってみろよ」

「んー、まあ痛そうだし、私は治してあげたいかな……ちよっと我慢してねー、すぐ治すから!」
何だこいつら？

明らかにこちらが年上だろうに、この勇者の態度はどういう事だ。才村が不安そうに俺の袖をぎゅっと掴む。

だが、英奈という子はノリは軽いが、根は悪い子ではなさそうだ。彼女がまず才村の手首に手をかざし、ぶつぶつ言いながら念じる。

すると彼女の掌から淡い光が溢れ、才村の手首を包み込んだ。

みるみるうちに赤黒い腫れが引いていく。

「あ！ 痛みが消えました！」

「おお、すげえ！」

魔法なんてファンタジーの産物を実際に見せられ、俺は思わず感心してしまった。

女子高生も自分の力に驚き、喜んでいる。

続いて綾瀬の腕にも手をかざす。俺は才村の隣にしゃがんで、その様子をじっと見届けた。

手のかざし方、念じる言葉、光の広がり方。……なるほど、あれが回復魔法のプロセスか。

俺は様子を見ながら真似を試みた……が、何も起こらない。当たり前か。

治療が終わり、綾瀬がそっと腕を動かして確認した。

「……痛みが完全に消えたわ。ありがとう」

眼鏡がないため、綾瀬は礼を言う方向が少しずれていたが、女子高生は「全然オッケー！」と明

るく答えた。

「さあ、治してやったんだ。治療代を寄せ！」

勇者が鼻で笑いながら、俺の前に手を出した。

……何言ってるんだこいつ？ バカなのか？

俺たちが頼んだのは王宮の人間であって、こいつらに直接治療を依頼した覚えはない。

「ちよっと、どういう事ですか！」

綾瀬が視界がぼやけているにもかかわらず、毅然とした声で前に出ようとした。

だが、俺は片手で綾瀬の肩をそっと押さえて制止し、もう一方の腕の後ろに怯える才村を庇うようにして立った。

少し雲行きが怪しくなってきた。

俺はこいつらの事を『鑑定』してみる事にした。

六人分を順に鑑定していく。さっき才村たちのステータスが見えた時の感覚を思い出し、視線を合わせながら強く念じる。

名前	.. 森信 界人
性別	.. 男性

種族 ..人間 (転移者)
年齢 ..十七歳
レベル ..1
所属 ..勇者
所有スキル..剣術 Lv1・全魔法の素養 Lv1・空間魔法 Lv1・
身体強化 Lv1・精神強化 Lv1

……何だこのスキルの数？ 俺のスキルなんて鑑定一つだぞ。
ただ、レベルはまだ戦闘をしていないから1なのは当然か。
流石に勇者でも最初から無双できるわけではないらしい。

……それと、所属。

俺や綾瀬のところには「社会人六年目」、才村なら「社会人一年目」と、元の世界での立場がそのまま出ていた。

だがこいつは、高校〇年生などではなく「勇者」だ。この世界の都合で、まるごと上書きされているわけか。

……ずいぶんと、雑な扱いをする。

残りの五人も同様にじっと見つめ、次々と鑑定をかけていく。
それぞれ何かしらの武器スキルと魔法スキルを所有している。
さっきの女の子は「揚村 英奈」で『回復魔法 Lv1』『罠 Lv1』と出ていた。
その時だった。目の前がチカチカと光った。
半透明の画面が現れ、

【スキル『鑑定』がLv2になりました】

と表示が出ている。

えっと？ スキルって、意識して何度も使えばその場でレベルが上がるのか？
俺はハツとして、急いで手当たり次第に周囲のものへ鑑定をかけた始めた。

自分のカバン、壁の装飾、床の石畳、遠くの兵士、残っている転移者たちを片っ端からじっと見つめる。

傍から見れば、俺は目をギョロギョロさせて周囲を睨みつけている不審者だろう。
だが、今はそれどころではない。

視界の隅で、表示が……レベル3……4……5と跳ね上がっていく。

すると、

【スキル『鑑定』がLv5になりました。ツリーが解放されます】

【スキル『索敵』が解放されました】

【スキル『査定』が解放されました】

【スキル『解析』が解放されました】

「……え？ 何これ？」

思わず声が漏れた。

ええと……スキルを使い続けるとレベル上がり、節目（レベル5）になれば派生する関連スキルが新しく解放されるのか？

索敵、査定、解析。名前だけで何となく用途は分かる。

目の前で勇者が「おい！ 無視するな！」と何か喋っているが、今はそれどころではない。自分のステータスをもう一度開く。

名前 ..常山 順平

所有スキル..鑑定 Lv5・索敵 Lv1・査定 Lv1・解析 Lv1

本当にスキルが増えている。

頭の中に、新しいスキルの詳細な情報が流れ込んできた。

【鑑定】..あらゆる人、物を調べます。レベルが上がれば調べる事のできる範囲が広がり、より詳しい内容が分かります。

【索敵】..周囲の魔物・魔獣の気配を調べます。レベルが上がれば、索敵範囲は広がります。

【査定】..アイテムの価値が分かります。

【解析】..アイテムの構造、成分が分かります。生物に対しては、生物の特徴、弱点等が分かります。

……おお！ なんだかすごいぞ！

これってこれから異世界で生き抜くために、かなり役立つ能力じゃないか？

神官が言っていた「外れスキル」なんてとんでもない。

鑑定、使い方次第で大化けするんじゃないか……!?

「おい！ 聞いてるのかおっさん！」

勇者の怒鳴り声で現実に取り戻された。

「ちよ、ちよと……界人君……」

揚村英奈が、おろおろと勇者の袖を引いている。

だが、その声はか細く、勇者の耳には届いていないようだった。

「何を言ってるんだ！ 僕は勇者なんだぞ！ 人類の希望だ！ それなのに、このリーマンときたら、よりにもよって勇者である僕らを利用してタダ働かせたんだぞ！」

揚村は袖を掴んだまま、何も言えずに黙り込んでしまった。

うわ、あほか？ この勇者。

止めようとしてくれる子が一人でもいるのが、せめてもの救いかな、と俺は内心でため息をついた。

「森信界人、それは過去の名前だ。僕の事は今後、勇者様と呼べ！」

勇者が高らかにそう言っただけでふんぞり返る。

……やっぱり駄目だこいつ。関わらない方がいい。

第3話 侍女の涙と、今後の方針

「まずはレベル上げだ！ 皆、僕についてくるんだ！」

俺たちへの興味が失せたらしい勇者・森信が、その場にいた一般の転移者たちに向かって高らかに宣言した。

うわ、とんでもない態度だよ。案の定、誰もついていかない。

当たり前だ、あんな威圧的な子供の号令に付き合っただけで命を懸けるほど、ここにいる大人は暇じゃない。そう周りの冷ややかなオーラが言っている。

「なぜ誰もついてこないんだ？」

「……まだ、みんな混乱してるんだよ。急に連れてこられたばかりだし……。まずは私たちが先に頑張っただけ、見本を見せよ？ ね？」

揚村が、勇者の機嫌を損ねないよう言葉を選びながら、懸命に取りなした。

「む！ それもそうか。では皆、僕たちは一足先に外へ出てレベル上げをする！ ある程度経ったら皆にもレベル上げをしてもらうからそのつもりで！」

「はいはい、さっさと行くよー！」

揚村に背中を押され、勇者様御一行は騒々しく回廊の奥へと消えていった。

「何だかすごい事になってますね」

才村が俺の背中からひよつこりと顔を出して呟いた。

「そうだな。……そういえば、俺たち、これからどこで暮らせばいいんだろうな」

「王宮にお部屋がご用意してあります」

いつの間にか俺たちの後ろに控えていた女性が静かに答えた。

落ち着いた身なりの女性だ。どうやら侍女という役目らしい。

「お三方はご一緒のお部屋がよろしいでしょうか？ それとも別々になさいますか？」

「お三方……？」

俺が振り返ると、綾瀬が何とか見ようと目を細めながら小さく頷いていた。

「私は一緒の方がいいわ。視界も悪いし、一人じゃ心細いもの。それでいいかしら、常山君」

「俺は構わない。才村もそれでいいか？」

「はい、お願いします……！ 絶対離れませんか！」

先ほどまでの「サボリ魔を見る目」は、もうない。素直に喜ぶべきなのだろうか。

もしかすると、「先輩って実は頼りになるんですね」と思ってくれているのかもしれない。

「かしこまりました。それと、今後の事ですが、お三方はどうされるおつもりでしょうか？ 落ち着

きましたら、冒険者ギルドで講習を受ける事を推奨されておりますが……」

「少し時間を下さい。部屋で話してから決めます」

「では、お決まりになられましたら、お知らせください」

俺たちは侍女に案内され、王宮のさらに奥、来賓用と思われる区画へと連れていかれた。



案内された部屋は、三人で使うには十分すぎるほど広く、豪華な家具が並んでいた。

入ってすぐ、俺はさっき手に入れた『鑑定』と『解析』スキルを使い、部屋の中を一通り調べた。

盗聴の仕掛けや隠し通路がないか、調度品の裏まで視線を走らせる。

その間、才村はてきぱきと三人分の荷物を棚に振り分け、椅子に積もった薄い埃をさつとハンカ

チで拭いてくれていた。

綾瀬は壁際によりかかり、見えづらい目を細めながら俺の様子を静かに見ている。

「よし、問題はなさそうだ。……でも念のため、小声で話そう」

「どうしたんですか、何か問題でも？」と才村が首を傾げる。

「多分ない。用心に越した事はないってだけだ」

俺は才村と綾瀬に向き直り、声を潜めた。

「二人とも、落ちて聞いてくれ。俺はこの異世界召喚というのが、かなり怪しいと思っている」

「……怪しいって?」

「ああ。国の一大事のはずなのに、一番偉い王様や王族の姿が祭壇に一切なかった。それに、魔王が本当に『絶対的な悪』なのかどうか、俺たちには判断材料がない。呼んでいる側が悪い奴かもしれないしな」

「確かに……一方的に連れてこられて『魔王を倒せ』だなんて、不自然ね。あの勇者たちを煽るような神官の態度も」

綾瀬が顎に手を当てて考え込んだ。

その時、重厚な扉がノックされた。

「常山様、よろしいでしょうか」

入ってきたのは、先ほどの侍女だった。その後ろに、さらに二人の若い女性が続く。

「先ほどご案内いたしましたティルザと申します。こちらは、綾瀬様付きのエルナ、才村様付きのリアネです。以後、お三方のお世話をさせていただきます」

三人は三様、息を呑むほどの美貌を備えていた。

ティルザは凛とした気品を漂わせ、エルナは春の陽だまりのような可憐さを、そしてリアネはハツとさせられるほど華やかな色彩をその身にまとっている。

そして三人とも、完璧な笑顔を作ろうとしているが、微かに肩が震えているのが分かった。

不審に思って話を聞けば、彼女たちは借金などを理由に王室に娘を差し出さざるを得なかった没落貴族の令嬢たちだという。

そして、世話係の業務の中には——転移者からの「夜の誘い」も含まれており、それを拒む事は絶対に許されないのだと、ティルザが血の気の引いた顔で告げた。

「……っ」

俺の後ろで、才村が小さく息を呑む気配がした。綾瀬の空気もびんと張り詰める。

俺が何を言い出すのかという、二人の緊張と戸惑いが背中越しに伝わってきた。

「……なんて国だ」

俺は深い溜息をつき、頭を掻きながら、なるべく柔らかな声でティルザたちに言った。

「ティルザ、顔を上げて。君たちに、そういう事は一切求めない」

「……え?」

「俺は二十八にもなって、嫌がる相手を権力で無理やり抱いて喜ぶような悪趣味はない。それに、

一緒に巻き込まれた大事な仲間が後ろにいるんだ。彼女たちを不安にさせるような真似はしない。安心してくれ」

その言葉を聞いた瞬間、背後の才村から「ふうっ」と分かりやすい安堵の息が漏れた。

そして目の前のティルザの瞳からは、ポロポロと大粒の涙が溢れ出た。

エルナとアリアネも、張り詰めていた糸が切れたように肩を震わせ、その場に泣き崩れた。

三人は部屋の隅で身を寄せ合い、声を殺してしばらく泣いていた。

「……よかったわ」

綾瀬が俺の隣に歩み寄り、静かに呟いた。安心したような声音だった。

「彼女たちの気持ちによく寄り添えたわね、常山君」

「そうしてなかったらお前が全力で止めただろ？」

「まあ……そうかもしれないけど。改めて、あなたを少し見直したわ」

「そりゃどうも」

三人が落ち着いたところで、俺はハンカチに包んでいた眼鏡の残骸をテーブルに広げた。

「綾瀬、こつちに来て座れ。眼鏡、何とかしてみる」

「え……直せるの？ フレームも完全に歪んでるし、レンズも外れてるのに」

「完璧には無理だが、応急処置くらいならな」

俺はカバンからソーイングセットを取り出し、その中のツールナイフを手にとった。

ひしゃげた金属フレームをナイフの背で慎重に押し曲げ、傷だらけになったレンズをパチリと嵌め込む。

そして折れてしまったツルの継ぎ目を、太い糸で何重にもぐるぐると縛り上げ、強引に固定した。
「ほら、直った。少しじっとしてろ」

俺は座っている綾瀬の前に立ち、不格好に糸でぐるぐる巻きにされた眼鏡を、彼女の顔にそっとかけてやった。

「あ……」

至近距離で顔が近づいたせいとか、綾瀬が微かに肩をびくつかせ、頬を染めた。

「傷だらけで少し曇るけど……見える。ちゃんと、常山君の顔がはっきり見えるわ」

綾瀬はホッと息をつき、理知的な瞳で俺をじっと見つめ返した。

「ありがとう、常山君。これなら歩けるわ」

「どういたしまして。街に出たら、もっとマシな修理方法を探そう」

「常山先輩、器用ですごいです……！ 私も今度何か壊れたら直してくださいね！」
才村が少し羨ましそうに、俺の腕にすり寄ってきた。

今まで『何かズルしているんじゃないんですか』などと思われていたはずだが、どうやら俺の評

価は爆上がりしたようだ。

その評価に恥^はじない行動をしないと。

ティルザが涙を拭い、「街に出られるご予定でしたら、喜んでご案内いたします」と申し出てくれた。

「ありがとう。その前に、一つ確認したい事がある」

俺は自分のステータス画面をもう一度、念入りに眺めた。

鑑定を使い続けている間に上がったレベルの表示の隅に、さっきから小さな文字がチカチカと点滅しているのが気になっていたのだ。

強く念じて『解析』をかけると、詳細な情報が頭の中に流れ込んでくる。

【召喚後百六十八時間限定の保護ボーナス。期間中は全スキルの習熟度および獲得経験値が大幅に上昇。新規スキルの獲得条件が極端に緩和^{かんわ}される（数回の反復実践のみで習得可能）】

「……なんだこれ？」

「どうしたの、常山君？」と綾瀬。

「常山先輩、何か見えたんですか？」と才村。

「……召喚されてから百六十八時間——つまり、あと七日弱の間だけ、スキルの成長率が爆発的に上がって、しかも新しいスキルを数回練習するだけで簡単に覚えられるという『ボーナスタイム』が設定されてるみたいだ。今この瞬間も、その時間がどんどん削れていつてる」

「えっ……じゃあ、今すぐ動かないと！」

「そういう事だ。この時間が終わる前に、生き残るために使えるスキルを全部かつ攫^{さら}う。今すぐギルドってところに行つて、講習を受けまくるぞ」

「先行者利益みたいなものね。やりましょう、常山君」

「はいっ、私も頑張ります！」

「ティルザ、悪いが今すぐ冒険者ギルドに案内してくれないか」

「かしこまりました。喜んでご案内いたします！」

こうして俺たちは、この世界で生きていく足がかりを探しに、王宮の外へと足を踏み出した。

第4話 初めての街歩きと、冒険者ギルド

出発の間際、ティルザが両腕いっぱい衣類を抱えてきた。

「おそれながら、そのお召し物のままですと、街では大変目立ってしまいます。こちらに着替えた方がいいですよ」

差し出されたのは、この街の住人が着ているのと同じ、飾り気のない木綿のシャツとズボン、それに綾瀬たちには落ち着いた色のワンピースだった。

確かに、スーツの集団が異世界をぞろぞろ歩けば、悪目立ちは避けられない。先ほど支給されたものも、街歩きには向いてなさそう。俺たちはありがたく着替えさせてもらった。

……五年間戦友だったスーツを畳んで棚に仕舞うと、妙な感慨があった。

さらばネクタイ。達者でな。

「王宮って、外から見ると本当に大きかったですね……」

巨大な城門を抜け、王都の大通りへと足を踏み出した瞬間、才村が振り返りながら感嘆の声を漏

らした。俺も全く同感だった。

中にいた時は、ただ長くて豪華な回廊や広間が続いているだけで全貌が掴めなかったが、こうして外へ出て見上げてみると、白い石造りの大きな建物が、視界いっぱいにそびえている。

威圧感すら覚える、権力の象徴そのものだった。

ティルザに先導され、俺たちは王都のメインストリートらしき大通りへと歩き出した。

綾瀬は、先ほど俺が応急処置で直した不格好な眼鏡をかけ、周囲を警戒するように俺の左隣を歩いている。

才村は右隣にそつと並んできて、俺の腕に触れるか触れないかの距離を保っていた。

石畳が敷き詰められた大通りには、馬車や、巨大なトカゲのような獣が引く荷車が行き交い、様々な身なりの人々でごった返していた。

無骨な剣を腰に下げた冒険者風の男、長いローブを着て杖を持った者、そして何より目を引くのは、獣の耳や尻尾を持った獣人や、俺たちより頭一つ分は背の低いドワーフのような種族が、当たり前のように雑踏に紛れている事だ。

ファンタジー映画やゲームの中でしか見た事のない光景。

ここが、自分たちの知っている現代日本とは全く違う、常識も物理法則も通じない異世界なのだという現実が、否応なしに押し寄せてくる。

「あの、先輩……」

才村が、不安げな上目遣いで俺の顔を覗き込んできた。

「万が一、この人混みではぐれたりしないように……手を繋いでいても、いいですか？」
見知らぬ異世界の喧騒のど真ん中だ。怯えるのも無理はない。

「ああ、構わないぞ。確かにはぐれたら厄介だからな」
やっかい

俺が右手を差し出すと、才村は待つてましたとばかりに、両手でぎゅっと俺の手を握りしめた。
少し汗ばんだ、小さな手だった。

体温が伝わってきて、彼女がどれだけ緊張しているかが分かる。

すると、左隣を歩いていた綾瀬が、少し間を置いてから、静かに口を開いた。

「……そういう事なら、私も繋いでおいた方がいいわね」

「綾瀬？」

「眼鏡、応急処置しただけだから、まだ少しピン트가怪しいのよ。それに、万が一変な人に絡まれた時に、私一人で対処できる自信がないわ。……いいかしら？」

少しだけ目を逸らしながら言う綾瀬の右手が、俺の左手をそつと包み込んできた。

理由は「眼鏡が見えづらいから」と言っていたが、その指先は微かに震えており、俺の手をかなり強く握りしめている。

普段は後輩をビシッと指導する立場の、完璧で隙のない受付リーダー。

だが、今の彼女もまた、見知らぬ世界に放り出されてパニックになりかけている、ただの一人の女性なのだ。

強がってはいるが、内心の恐怖は才村と変わらない。

「ああ、遠慮なく頼ってくれ。絶対に手は離さないから」

「……ありがとう」

結果として、俺は両手をふさがれる形になった。右に才村、左に綾瀬。

自分から言っておいて何だが、あどけなさの残る愛らしい後輩と、整いすぎているほど凛とした大人の美貌を持つ同期に、両手を握られて歩くというのは、傍から見ればどういう状況なのだろうか。

すれ違う冒険者や男たちが、時折こちらを嫉妬まじりのギロツとした目で見てくるのが分かる。

……正直、かなり心臓に悪い。

シャツ越しに二人の柔らかい体温が伝わってくるし、歩くたびに微かに甘いシャンプーの香りが漂ってくる。

だが、これはあくまで安全確保のためだ。

落ち着け俺。こんな状況につけ込むような、よこしまな考えを持つてはいけない。